

朱鞠内湖湖底堆積物(St.2 から6) 表層の花粉組成は、出現する花粉分類群に大きな違いはないものの、その割合は地点ごとに若干異なった(図 2)。湖中央部の St. 2 では、湖内5地点のうちでもっともカバノキ属花粉が多かった(高木花粉総数の24%)。三つの内湖が合流する St. 3 では、イネ科(17%)やカヤツリグサ科(Cyperaceae; 12%)などの草本花粉の割合がやや高かった。泥川河口の St. 4 とブトカマベツ川河口の St. 5 では、よく似た花粉組成が得られた。モシリウンナイ川河口の St. 6 では、コナラ亜属花粉が64%と非常に高い割合を示した。これらの湖底堆積物表層の花粉組成は、朱鞠内湖集水域北端に位置するクンベツ湿原(KTB)堆積物表層の花粉組成(図 2;高原ほか, 本報告書)に比べると、カバノキ属花粉の割合が著しく低かった。また、泥川河口の St. 4 とその上流部の泥川湿原では似かよった花粉組成が得られたが、泥川湿原の UDA1 ならびに UDA2 地点(図 2;高原ほか, 本報告書)の堆積物表層では、試料採取地の周辺がアカエゾマツ林であることを反映して、トウヒ属花粉が10%以上の出現率を示したのに対し、湖底堆積物ではほとんど出現しなかった。

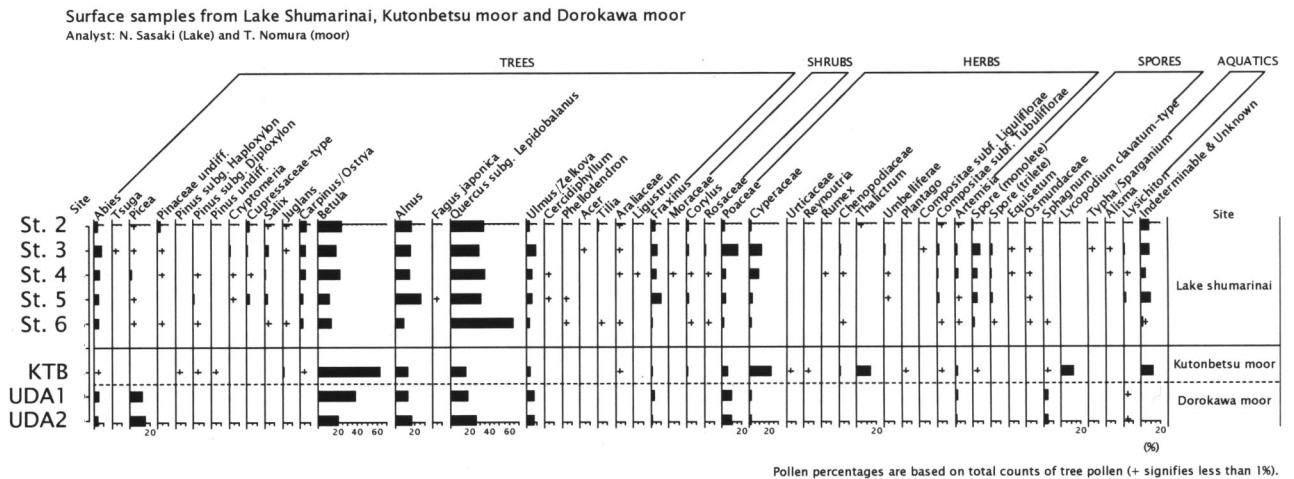


図 2. 朱鞠内湖湖底堆積物表層ならびにクンベツ湿原・泥川湿原表層の花粉組成
各分類群の出現率は、高木(Tree)花粉総数を基数として算出した。

まとめ: 湖中央部で採取された St. 2 堆積物の花粉組成に変化がみられなかったことから、朱鞠内湖造成以降の過去 60 年間には、集水域全体としては大きな植生改変はなく、現在みられるような針広混交林を主とする植生が広がっていたと考えられる。ただし、St. 6 の堆積物表層では湖内の他地点に比べコナラ亜属花粉の割合が高いなど、地点によって堆積物表層の花粉組成に違いがあった。集水域内の植生の空間分布を考慮して植生変化をとらえるためには、複数地点での花粉分析結果を総合的にみていく必要がある。

引用文献:

高原 光・谷田恭子(2004)花粉分析法と炭化片分析法. 安田喜憲編『環境考古学ハンドブック』190-204. 朝倉書店, 東京

第 53 回日本生態学会大会にて発表した内容である.

* 現所属: 国立環境研究所地球環境研究センター

** 現所属: 京都大学フィールド科学教育研究センター